

28amG-001

主体的に学習に取り組む態度を育成する薬学入門実習の検証

○武田 直仁¹(¹名城大薬)

【目的】名城大学薬学部では6年制カリキュラムの導入を機に、1年次に4回の課題探求型学習で行う薬学入門実習を組み入れている。過去5年間にわたる薬学入門実習「くすりの形」の事後アンケート調査結果を精査し、学生による自己評価（主観的評価）と、実習レポート成績評価や局方概論期末試験結果による他者評価（客観的評価）が相関するものかを調べ、薬学入門実習が実際に主体的に学習に取り組む態度教育にどのくらい付与しているかについて省察した。

【方法】事後アンケート調査票（16質問と自由記述欄から構成）は5件法（3を中位の「ふつう」として4：「大体」、5：「十分」、2：「やや不十分」、1：「不十分」）で行い、相関関係を調べる分析では、それぞれ1点から5点の得点とした。

【結果および考察】「くすりの形」を題材とした入門実習に対する過去5年間の学生満足度は高く、「本実習で薬学への興味が増したか」の質問では8割以上の学生が「増した」と答えた。学生の自己評価の合計点（質問1～3、15、16）を説明変数として、レポート成績（100点換算）と局方試験成績（100点換算）を従属変数とした散布図を作成し相関関係を調べた。ピアソンの相関係数（ r ）は前者では0.125、後者では0.123と、わずかな弱い正の相関がみられた。これらの相関には $p \leq 0.05$ で有意な差がみられた。

【まとめ】1年次に白衣を着用し基礎実験をさせる薬学入門実習は、学習意欲を高める効果をもたらすことが、学生の主観的評価と教員の客観的評価が一定の関係を示したことから示唆された。